

真 生

第七卷 第八號



□ 古來偉人の生活を見るに多くは艱難の中に人となつた人ばかりである。之を以て之を見れば「艱難汝を玉にす」と云ふことは必ずしも嘘ではないやうである。

□ 然に世間の人々はどうしたものか、艱難な事業を避けて安樂な仕事を望む、之主としてこれ等に偉人の生活がない所以であらうか。

□ 乍然誰として、自ら艱難な生活を望み、自ら安樂な生活を嫌ふものがあらうか、恐くはこれ人としてか、る生活はあり得ないことではないか。

□ 然にそれにも關らず、古來幾多の眞人は自ら艱苦を厭はず難事をも事とせず一身も献げて之に當るは何故であらうか、それは彼等が眞實の道に生きんとするが爲めである。

□ 偉人と雖も好んで難事を喜ぶものでなく、艱苦を樂しむものではない。たゞそこには身命にも代へ難い理想實現の止むに止まれぬものがあるからである。

□ 従て、その爲めには身命も惜まず、艱苦も辭せず難業もこと、しないと云ふまでである。従てそこには何ものとして之を妨ぐるものもなく、よし之あるとするも之を破つて突進して止まれぬものである。

□ そこに偉人と凡人との境があらう、凡人には理想がなく又従つて献身の生活がない、故に艱苦を壓い、安逸を貪る。乍然偉人の生活は理想がある。理想の爲めには身命もない、艱苦もない、従て難事も難事とせないのである。

□ 艱難汝を玉にすとは即ち其のことを謂たものである。(念)



目次

一人泳ぎ	尅子
富者の子と貧者の子	土屋觀道
大阪市民館長の説話	土屋觀道
禪勝房	中村神羽
念佛修養會の感想	福原泰作
地方法況	吾朋便り

▽庭の木々を見ると、小さい木も、大きい樹も皆一様に伸びてゐます。

▽又其間に草花が咲いてゐる、蟻が匍つてゐる、鳥が飛んでゐる、蟬が鳴いてゐる。同じ天地のお恵みで、斯くも深山のものも、各個各別各様に生かして頂いて居れるといふことは全く不思議であります。

▽だから各個各別の生命は營んでゐるが、一つの力に因つて生かされてゐる者だから、全く別な異つたものとは思はれません。一つの生命によつて運轉してゐる個々の生命だから其儘大きい「一つの生命」を創造してゐるのでした。

▽本當に庭中のものが一つ呼吸を一息／＼調子合はしてしてゐるやうに思へます、同時に家も土台石も、人間も其共息をしてゐます。全世界が此の生命の上には一つの大きなコースを形造つてゐる事をどうしても疑へません。

▽そして此の綜合體は、それ自ら一つの大きな目的に向つて進んでゐるやうであります、だから個々も、個々の動きをしなから、又根本使命に統攝せられて、それ自らの大自的へ歸趨してゐるやうに感ぜられます。

▽此の統一原理を如來さまの御名によつて、如來さまの生命と如來さまのみカラダと、如來様の御働きとを信せず居れません。宗教の出発点は、皆な、此の現實分離の上に綜合理想を見出して來る事から、先づ始まると私は思ひます。(尅)

□私達は本當に行き詰まつて、二馳も三馳も出來ぬやうにならねば、本當にお念佛を申しません。

□本當にお念佛を申さぬものだから、お念佛なんかしても、何にも得るところがない、何も有難いことがない、念佛なんかしてゐる處を見ると、實に馬鹿／＼／＼して見て居れぬと云ひます、そんな事を云つてゐるのは、その人自身が、まだ真にお念佛申さずに居れぬ程眞劍になつたことがないといふことを表明してゐるのではないでせうか。

□お念佛が有難いのでなく、お念佛申さずに居れぬ程、眞劍になつた自分が有難いのです本當の自分の姿にまで徹透すると、此の「自分」は案外大きな仕事を「偉ら佛」です無限の眼力と、無限の働きを持つてゐるのです、それが一皮脱いで、素地の「自分」になると遠慮なく出て來て呉れるのです。それが如來さまから戴いた御力であり、自己本然の力であり、二者がこの皮の下で一つものであるのです。

□それが皮を脱がずに如來さまの御助けを願つたり、皮の下から出て來たお慈悲でない時に、みな如來さまのモノではありません。眞實の如來さまのお恵みは、常に此の「自己を通じて」現はれて下さいませ。

□恰度大河が小川となつて、めい／＼の家へ入り込んでゐるやうに、私達は皆な如來さまの大生命に連つてゐる生命であります、だから本當に本心の要求を聞いた時、必ず今迄の要求とは違つてゐます、この本當の要求も、今迄は上から舊い習慣性の爲めに壓されて出て來ることが出来なかつたのです。だから再々に「如來さまよ」「如來さまよ」と呼びかけて行く時、一遍／＼厚い皮がはがれて、だんだん如來さまの御光りが漏れて來るやうになります。

□そして潮の満ちて來るやうに、如來さまのみ力に充たされて來ると、大宇宙の大生命全体を自己一身に体してハッキリ生かざる、意氣を感じます。

□どうしてもお念佛が絶へると自分が浮はつて來て、一人泳ぎをします。獨り遊びをせないやうに、本當の遊びをせねばなりません。(尅子)

富者の子と貧者の子

土屋 觀道

或るところに、富者の子と貧者の子とが住つていた。富者の子は初めから終りまで一生何事も不自由なく、することなすこと一としてまゝならぬものとはなかつた。彼は母親のお腹に宿つてから以來全く王侯のやうなもてなしを受けて生長した。其の家の人々の喜びは云ふまでもない、隣り近所の人々や遠く富豪因籍の人々まで大喜びに喜んでくれた。

目出度出生したかと思ふと、すぐに乳母までが附けられた、段々と生長するにつれて、衣食住の一切が思ふやうに給せられた。學校もとにかく大學まで行ける身となつた、そしてまた、妻君も早く貰へたそれも非常に氣容よしのことで世間の評判も高かつた、おまけにやはり名望家の娘であつた。

大學も卒業し、一家の主人とまでもなつたので、根が富豪の子であるから何一つ働かなくても困ることもなくいかなる夏も、いかなる冬も、彼れには寒暑と云ふものも知らない位であつた。それは彼には幾つかの別荘が親の代から設けられてあつたのと、其の下には幾十、幾百の召使があつたので、彼の一生は全く何等の不自由と云ふものがなかつたからだ。従て彼には今日の生活難も思想難も知らなかつたやうだ、かくて彼の一生は常に他からは羨望の的とさへなつてゐた、でも彼もいつかは死んだ。

然に一方の貧者の子はどうしたか、母親のお腹に居る頃から、あまり歓迎せられたと云ふ方ではな

つた。いやそれどころか寧ろ又かと云ふやうな待遇であつた、生れてからも、一家貧困な爲めに乳母などはもとよりのこと時とする其の日々の乳でさへろくに飲むことを許されなかつた。まして、大きくなつてからは殆ど他家に傭れて一生を勞働にのみつくすのであつた。

だから、彼の一生は全く其の日暮しの日給取りであつた、學校と云つても漸く尋常六年も出たか出ぬに過ぎなかつた、而もかくて彼は終生一生を貧困の中に暮して一生を終つた。

二、

さて、私の問題は此の二人の生活に於て、吾人はその何れを望むかと云ふことである。

然に世には得てかうした生活の人々が多いと共に、ともすれば一生を富者の子として望み、一生を遊んで暮すことのみにあこがれる人が多くして、自ら貧者の子として事業にいそしみ、一生を苦難に終はらうとする人がないやうである。

乍然眞實の人生は何れが本當の人生であらうか、私達はそこに一つの活眼を要するものがあるではなからうか。

折角人と生れて來たほざならばせめて半生でも安樂に暮したいと思ふのが人情の恒である。ましてや一生を生活の爲めに逐い廻はされ、一日として休む暇もなく、仕事の爲めに使はれると云ふことは甚だつらいことである。ましてや、世の多くの富豪の何一つなすこともなく一生を安樂に暮すに比べて、決してそれが幸いと思はれぬと云ふことも普通の人にはむしろそれが當然であるかも知れぬ。

乍然富者の子が將して幸福であり、貧者の子がそれほど厭ふべく、また不幸であるかは其の生活の内容と其の人の生活に對する反省の自覺とを要するものがある。

一見したところによつて、貧者の子と富者の子とを分ければ前者が後者より不幸のやうに見ゆるのは

事實であるが、之を實際について深く考へれば、富者の子に生れて来た者が幸福か、貧者の子と生れた者が幸ひかは更に一考を要するものがある。例へば録に母親や父親の懐にも入れられず、全く金銭によつて傭はれた乳母の手にかゝつて育てられた富者の子と、初めから終りまで、住む家は狭くても其の自らの産みの母親に育てられた貧者の子と何れが幸福であらうかは已に考ゆるまでもないやうな氣持ちもする。

自分は乳母つきで育つた子であると云ふのは、富者を以つて誇る人から云ふならば富者の方が貧者に勝ると云ふことは一應考へられることではあるが、其の子の爲めから考へて何れが幸福であるかと云ふならば、もとより生みの母親から育てられた貧者の子の方が仕合であるではないか。どんな母親でも其の母としての情は乳母にまさること數等であらう、然らば富者の子は乳母の手にあることに於て必ずしも貧者に勝るとは云へないであらう。

又、勞働をする人々が体格の上にも丈夫であり、どんな物を食べてもそれがおいしく食べられると云ふことから見れば、一生何等の働きもせずに美食に飽いて遊んでゐる人々は他から見れば幸福でないかも知れぬ、私の知人によのねと云ふ兩部神道の達人があるが、その人は五穀を斷ち、火物を食せず、いつも大豆やソバ粉のみを食べているが「いつもおいしくそれが食べれる」と云ふ。私が「切角此の世に生れて美味な食物があるのに、それを斷つと云ふ理由がないではないか、要するによのねさんなどはそれが食べれないやうに生れついた人だ」と少々からかい半分に云ふと「なぬに、之でも結構にお好しよ、いかに美食してもそんな人は結局その美食の味が判らない、おれは之でもまづいものをおいしく食えるのだから同じだよ」とそんなことなど全くおかまい無しである。ときたまに果物など出すことがあると、その喜び方と云つたらたない、そしていかにもおいしさうにその皮までも食べると云ふ有

様である。

かうした所から見ると食物などは其の食べる人の如何が大へんに關係する。従て富豪の食べる毎日の美食が必ずしも乞食の食べるそのものと主觀的に見ておいしく食べれるとは限らない、朝から晩まで寢てばかり食べる御馳走よりも、朝から晩まで働いて腹のへつた時に食べた日の丸の辨當がよつほどおいしく食べれるのは、かうしたわけがあるからだらう。

三、

それは暫く別として、今此の富者の子と貧者の子とを社會的立場から考へて何れが眞に價値ある生活者であつたか、富者の子が一生何等の爲すことも仕ないで遊んで暮したに對して、貧者の子が一生働きて暮したと云ふことは遊ぶと働くに云ふ点の相違であるが、此の遊ぶ人と働く人と、個人としては遊べる人より働かねばならぬ方の人が不幸のやうであるが、社會的にはそれだけ効果を爲したと云はれぬであらうか、言かへれば一方は一生殺つぷしとしての消費者であり、一方は一生働いた生産者であると云へないか。少くとも一生道樂して國家の財を消費した点に於て、一方は少くとも一生自らの衣食を自分で生産したと云ふことは確である。

加之、此の二人が一生を終つた後ち、此の二人の生活を考へれば、富者の子は一生を遊び暮して、社會國家に残すものとは何ものもない、之に反して、貧者の子は少くとも其の働いたことによつて其のなした仕事の何者かは必ず社會に残るであらう。或は傭はれて井戸を堀つたとすれば其の井戸は尙永久に幾多の人に水を提供し行くことであり、若その人が鐵道をかけたとすれば其の人が死んだ後にも、其の鐵道は尙幾千の人を幾百年と運ぶであらう。其他家を造り、壁を塗り、或は道路を開いた等の仕事をしたとすれば、其の仕事は皆悉くそれらの事によつて後世永く多くの人々を助けることとなる。

私はかうした意味に於て、初めて労働の神聖なる意味を知つた。富者の子必しも幸ならず、貧者の子必ずしも不幸でない、人は貧富の如何を問はず、自らの爲すべきことを爲すことほど人生として尊いものはない。

然にともすれば世の多くの人々は人格ある行爲なくして人格者たらんとする人が甚だ多い。乍然それは恰も木によつて魚を求むるが如きものである、世に人格ある行爲の外にどこに人格なるものがあり得やう。何となれば人格ある行爲の外に別に人格なるものは無いからである。

従て、私共が一生何事も爲さずして此の世を送るのはそれは全く自分の命を無駄にすることであつて凡そ世の中に之ほど愚かにも又哀はれなるものはない。従て、人生の眞意義は其の人の一生價値ありしむることである。而て貧者で暮すとか富者で暮すのが人生の意義でない、一切はたゞそれが如何に社會的に價値を爲すかに存じてゐる。

此の意味に於て、一切の社會を見るに、私達の人生は可なりに見直し、立直すべきものが多いではないか、それは多くの富者の子必ずしも貧者の子よりも仕合とはいへないことである。而てまた、貧者の子、必ずしも富者の子よりも不幸であると云はれぬことだ。否、心して一切世間の眞相を望むれば世には幾多の偉人の生活が名も無き労働者の中にあることを發見する。言換れば此の世は有産家の多くの子弟よりも、寧ろ無産家の精進努力によつて、開拓せられ維持せられつゝ、あることを發見せずにはゐられない。

私はこのことを考へ來つて、今更のやうに貧者の子の自覺と富者の子の反省とを促がさるを得ないものがある。私達は今や金錢の有無にか、わらず、地位の如何を顧みず、むしろ生あるものとして、正に眞實の生活に自らを活かさねばならぬ秋が來た。(三、七、二八)

大阪市市民館長の説話

土 屋 觀 道

五月と六月とを休んだので大阪の方も大へん間があつたやうであつた。七月十七日の大阪市市民館の集りは四十人許りの集りであつた、私は信仰と生活に就て一時間の話をした、信仰と生活とは一致すべきものだ云ふことに就てあつた。生活を指導し改造して行かないやうな信仰は眞の信仰でない、少くとも眞の信仰は常に其の人の生活を向上の一路に進めしものであるとのことであつた。

市民館長志賀氏は「眞生の實現化」として、大阪の自明會での自分の話を復説された、自明會とは大阪に於ける浄土宗寺院有志の集會である。氏は其の會に招かれることによつて、少くとも今までの寺院に對する自分の考へが一變したと云ふのをきっかけに、今後の寺院は決して外の會館とか社會事業とかさうした事柄など模するには當らない寺院には古來寺院としての尊い使命があるではないかと思ふ。それは特に今日のやうな社會に於て一切が經濟化して行く際に各都市が住宅化して

行つて、貧民階級の休む所もない時代に於て、今日の寺院が之を民衆の爲めに開放して頂くならばそのまゝ、が實に一つの精神休養所として、他の所得ることのできない一種の宗教情操を涵養することができないかと思はれる。己に各寺院は別に外に向つて發展しなくても、其の自家なるものがあつて、先祖から代々やつて來た葬式とか法事とか云ふものがある。而かも一見葬式とか法事と云ふものは何でもない事のやうに今日の社會では考へられてゐるやうだが、乍然これは見やうによつては其の一家に於ては一つの重大なる意味を持つものである。だから今日の寺院は此の方面に於ける自分の獨占の場合を充分に守つて頂くならばこゝに一つの社會單位としての寺院壇徒の改善ができるのであつて、諸君は最も此の有利なる地位を得て居られるのであるとの實

感を述べ、尙今日のキリスト教の洋館式や會館式はそれには又それとしてのよい所もあるが、それらのもの、到底持つことのできない、古風な、静寂と平安なくつろぎを得る特長を持つてゐることを述べた。私はこの館長の話を聞き乍ら、いかに満足の極みであつた。ともすれば今日の寺院をのろい易い時代に於て而も嘗ては主として基督教系の人として今日の寺院などには反感をこを持つべき地位にあつた人がかほごまでに寺院を理解し寺院に厚意を持つと云ふことはさすがに市民館長として社會事業にたづさわる人格の人として感服した。而もかうした考へを今日の寺院始め多くの民衆に向つて之が理解を得るならば少くとも今日の寺院は今一段の社會的地位を得ることであらう

□理想の實現化。尙氏は一步を進めて、今日の社會は可なりに進んで來た、乍然自分がこゝに尙一つの足らぬと思ふことは今日の學術研究の應用である。いは、科學の現實化、即ち理想の實現化である。少くとも我眞生クラブに於てもたゞいつまでも理想のみを追はないで、その理想を求めて之を

研究すると云ふことも結構なことではあるが、それと同時に私共は之が實際化即ち之が生活化にまで進むべきではないかと思ふ。ついでは何事にか、わらず私共の手で考へ又やることのできるものならば少しでも社會に率先して一步之が實現化に着手すべきでないかそれは今日に於て多くの人が各自應分の生活改造をやつてゐることではあるが、かうしてお互が集つて之を研究し、之を實行するに於て一層尊いものを得ることができるとはなにか、譬へばその一例として、共同住宅を造るが如き、或は各自の不用のものや、其の他のものを持合つてバザーを開くが如き、或は購買組合のものを作つて其の經濟的調節を計るが如き尤も當を得たものではないか、とかうした話が道友の中に語られた。之は己に私共各地の道友間にも語られたことであり、又己に或る所、静岡縣の清水市や名古屋の道友に於て行はれたことでもあるが更にかうして大阪の市民館に於て、之等のことが議せられると云ふことは此の上もないよいことである。氏はかうした方面に於ては己に市民館長と

して充分の學術と實際とを兼有せらるるの人である。若し各地の道友がかうした意味に於て御相談

があるならば氏は喜んで私共一般の爲めに應じて下さることになつてゐる。(三、七、二五)

禪 勝 房 (中ノ一)

中 村 神 羽

地 方 法 况

柏崎修養會畧記 會 田 証

秋だ、秋だ。もう秋になつたのだ。京は秋にふさわしい、京の秋は人間の心を眞面目にする。何とも云へぬ閑寂な氣持に人の心を落着かしめる。

秋は閑かた京の秋は殊に閑かた。其閑靜の、京は塵ヶ谷の此方、新黒谷と名付けられた杜の中に檜の綱代垣には柴の扉を引き結び、雜木もなき平庭に三室斗りの些やかなる禪堂！

是れこそ當代の信仰界を双肩に負ひ給ふ法然上人の御房である河内の強賊天野の四郎が法蓮房信空の住み玉ふ白河の禪房で許らずも椽の下から法然上人が、極重惡人無他方便唯稱彌陀得生極樂の理を説かせらるゝを小耳にした事から、ハツキリとは譯らぬ乍らも我身に自省の念も起り、何やら心引きつけらるゝ儘に此新黒谷の庵に夜更けて忍び込んだ時、無論物取りの心ではないが

思へ掛けぬ長き日に惠まれて六月廿日より三日間、柏崎を中心とせる吾が道友は眞光寺に於て土屋御上人に依りて念佛修養會を開いて頂きました。三月御上人の御來錫以來八月の唐澤御別時迄親しく御教化を仰ぐを得ざる失意に居りし道友は此の惠みを悦ぶ事限りなきもので有りました。御上人は岐阜の古賀様御同伴十八日朝柏崎に御着き遊され打合せの爲め一列車丈け原様に御休み直ちに見附町及三條町へお越し二日間の御傳導を終られ御歸柏下さる

修養會は午前午後共五時半より七時半迄お念佛、日中は念佛修養隨意とし夜は八時より三夜連続の御講演を願ひました。時恰も當地年中行事隨一の賑へたる闇覽市の後にて人の心

「何ぼ世捨て人とは云へ、之では餘りにあつさりし過ぎて居る
 佛像經卷の外には清楚な調度が若干ある斗り、何にもないと云
 つても之は又た案外な有様だ。」

とつぶやいた程さつぱりした閑楚な御住居である。
 此頃世間知る處で評判された大きな人物が三人程あつた。平清
 盛、源頼朝、夫れに此御房にまします法然上人。

前の二人は政治的巨人だが、この上人は智慧に於て、博覽に於
 て、信仰に於て、人格に於て、とても想像出来ない程大きな深さ
 が誰れにも見通ふされなかつた。夫れで居て知るも知らぬも其の
 奥深さ偉大さを噂さしない人はなかつた。

中にも心ある人々は上人と時代を共にし殊に親しく御法談を承
 り得る不思議の因縁に無上の光榮を感じつ、口より耳に、耳よ
 り口に喜び合ふたのである。

今ま座敷には傍の經机に幾巻かの聖教を置き、少し前かゞみに
 墨染の衣、同じ色の袈裟をかけ靜かに念珠爪練りて居給ふは正し
 く其中くぼみなる御頭顱に知るべき上人様であらふ。御年の程七
 十三四か、も少しふけても見ゆる。

上人に向ひて下座に懇懃に手をつかへたるは今日新らたに御教
 へを仰がんとて入室したる中年の求道者、日やけした旅づかれの
 顔にやはり墨染の法衣。

二人の前には一通の書狀が繰りひろげられて居る。

「熊谷の入道殿は御達者でしたか、此消息の模様には依るとわざ
 く關東へ御下だりになり、而して更に都へ御上りとは嘸ぞ御
 つかれとも御座いませう。承れば無智罪重の者如何して眞實の
 報土に往生す可きか、よし夫れを許すすとしても他方は他因な
 り他因を以て自果とする事は道理にかなわざるかとの御疑ひの
 様でしたね。御尤もの事です、御熱心の程も思はれて有難い事
 に存じます。ま、ゆるゆる御くつろぎなすつて御得心の行くま
 で御滞在下さい。共々に此一大事の信心を進め合ひませう。」
 偕ては此僧は此夏蓮生入道を訪ねられた禪勝房であつたのだ、
 武藏から遙々百幾十里を旅して來た遠方の道心者であつたのだ、
 熱情的な法力房に多少動かされないでもなかつたが、どうも學的
 根據に乏しい様な氣がしてならなかつたし、夫れにあの頭から論
 理を無視してかゝる強い口調に何となく壓迫が感じられて、どう
 も謙虚な無我な氣持になれなかつた。でも夜もすがら心ゆく斗り
 も語つたのてしつくりした落着きは味へた。御蔭で一しきり見た様
 な焦燥さは無くなつた、而して今は此の様に慈愛溢るる斗りの偉
 大な上人様の前にかしこまつて見ると、もう疑問などは何處かへ
 行つて仕舞つて、すつかり救はれた様な氣になつて言葉もなく唯
 だ押し黙まつて居る斗りなのである。

も落ち着かぬ折にも係らず三夜を通じて聴衆
 堂に充ち何回か總起立を乞へて席を詰めるこ
 雖も尙ほ御拜口や窓外に立ち盡して終り迄一
 心に傾聴する人を嬉しく見ました。御上人の
 御講話は本源の如來様と人との關係より淳々
 とお説き示し被下て各自の佛性を呼び醒し其
 歸せんとする本心の向ふ處をハッキリ理解せ
 しめ下され、最尊第一の阿彌陀如來に歸命し
 て全一の生活に精進する者の幸福を教へ給ふ
 事實に熱烈として人の肺腑を突き大いに内省
 覺醒せしむるもの有り、尙ほ如來の大慈悲を
 御体顯を以てお語り聞かせられ、愚かにして
 弱き吾等の常に如來大悲の愛護の中に救はる
 の仕合を感喜せしめ給いて奮勵を興へらる。
 二十日午後は商業學校の希望に應じ二時より
 二時間御講演を願ふ。

二十一日は午後一時より眞生會婦人部大會開
 かれ、之又來會者豫想を超えて多く深刻なる
 實生活の切實なる御教訓に各々自己の内心を
 指摘せらる、かを感じて其改善を誓ふ。

二十三日は岬町後藤甚次郎様お老母の念願よ
 り御上人お招待せられ、道友十余名お供さし
 て頂きお念佛に續いて御法話を御近隣より參
 集の方々と共に拜聴し、臨海の離れ座敷に初

夏の海景、大自然の畫として其雄大なる展開
 に賞揚措く能はず、恍惚として畫中の人たる
 事暫し、聽て心盡しの御淨養を頂き辞去致し
 ました。此の夜より二夜春日村桑野喜太郎様
 宅にて御講演を乞ふので有りました。桑野様
 御夫婦の日頃作佛度生の御熱望は不斷の御努
 力を待つて二夜共家中一杯の聴衆にて多くは
 農家の方々まで日長の候、随分御疲勞され居
 るに係らず、お上人の眞劍に引き付けられ、
 一心に聞き入り御講演終るも雖も、立たんご
 もせず座談に依りて尙も何かを得んとする其
 熱心に大いに感激せられました。(紙面の都
 合上後略記)

吾朋便り

▼伊勢 谷古家實様より
 お上人様先日是有がございまして。
 お別れしてから藤森様と二人で山田に參りま
 したそして之の眞生運動の益々發展せんご
 を神宮にお誓ひして二人は別れました。
 いつしか雜務に追はれて淋しく暮してゐまし
 たが一週間行基寺様のお別時でお上人様のあ
 の御熱心な尊き叫びに接ししつくりお念佛さ
 せて戴きましたそして以前に益して更に一層

「六道の巷に迷ふて居る私達は罪と云ふ事さへ知らぬ罪人でありに諸佛諸菩薩に見捨てられ十方佛土の門戸を閉ざされて本當に助かるすべもないのを、如來様の本願意志の大力に引き立てられてやすやすと助けらるゝと云ふ事は、何と云ふ有難い事であらうござらう。我が力で助かると云ふものならば色々疑ふ餘地もありませうが、法藏菩薩因位の時四十八の顔面を起して、唱念する衆生を來迎引接せんと誓ひ正に成就して既に十劫を経給ふ由聖教に見えて居ります。ですから眞實に往生せんと思つて念佛する私達を浄土に迎へて成佛せしめ給ふ事は元と元と本願他方に依るが故に疑へない事なのです。夫は全く如來の三力が加被護念攝受するので、私達の稱名の因と如來不可思議智の増上縁とが和合する處に往生浄土の因果が成り立つのです。但し單なる因果は概念構成上の仮定律に過ぎません、佛敎の深ひ敎理を究明して行く爲に、始めは解し易ひ因果を立て、其上更に因果を以て因果を打ち破つて行く、此事は龍樹菩薩を研究せらるゝならよく御譯かりになる事と存じます。因果法は明らかに學問上の暫定法則なのですから、常に變易しつゝ、ある現象界は簡單な因果丈では明らかにされません。今ま念佛して助かると云ふのも其理りであります。一つの例で申し上げますと、私の如きは云ひ甲斐なき美作の土民で、昇殿するなどは思ひ

進まさせて戴いた事を心から感謝させていた
ダきます。
そして自分の今後生くべき道を益々ばつきり
見出させて戴いた事も私にまつて力強い悦び
でござぬます。
親友である石川君が私の清き信仰の叫びに共
鳴して忙しい中をお別時に参加して正しき信
仰に入つて戴いた事を何と云ふ喜びでござぬ
ませう、本人も泣いて悦んでくれました。そし
て私の悦びは更に一層強いものでした。
毎月廿日は店を休んで石川君とお母さんと私
と三人でじっくりお念佛することに定めまし
たその第一回が明日かと思ふさうれしくつい
今夜もれわれませぬ。
▼静岡市 藤井貞邦様より
お暑いのに皆様お變りには御座いませぬが、大
寶曼荼羅は署名切かへました。タイもテイに
訂正致しました、それから栗生様へ参り相談
致しましたが色を用ひて印刷しますと、形の
小さい上にテバ／＼して玩具かメンコのやう
になるこの事で、私も御尤も存じ黒で一度刷
さいふ事に賛成致しました。私等には仕上つ
てからでなご分りませぬが、それを職業にし
て居らるゝ方には出來上らぬ内に調和不調和

依らなかつた事です、御上よりの御召に依つて二度迄も殿上
へ参りました。之れ偏に御上の他方に依つてはありますまい
か、ですから我が身の罪重く無智の者故往生疑はしなごと思ふ
事は本願のわけを知らず因果の因を唯だ一つ丈にしか見誤り思
ひ誤りするからだと思ひます。如來様の方には有智無智、有罪
無罪、善人悪人、持戒破戒、男子女子、さうした別け隔てはな
いのです。皆な一樣に一人子として御救ひ下さるのです。です
けれども極樂はいやだ念佛は嫌ひだと有つては全く手懸りを失
ひますが、御念佛に勇みある人ならば誰れでも百人は百人決定
往生するので、如來他力の本願とも超世の悲願とも申します。
此選擇本願の旨は聖善導の指南に依つて日本に於ては私が初め
ての提唱ですからまだまだ不案内の方々が多様です。大抵従
來の聖道門的立場から我が機にこだはられるので信心が決定し
ないのではないかと思ひます。本願は善惡の機を超え萬機を納
め盡くして居りますから、唯だ生まれつきのまゝに智者は智者
の儘申し愚者は愚者の儘に申し道心ある者は有るまゝに申し道
心なき者は無きまゝに申し、乃至富貴貧賤慈悲あるも慈悲なき
も慾深きも腹惡しきも皆な盡く本願の不思議に納め取られて念
佛往生するのです。ごごかしく機だの因果だのと沙汰したりま
た何か高く深き義理ある如く論げつらふのは畢竟本願の尊さを

上品、下品といふやうな事もおわかりになる
ものだと存じましたから御説を尊重致しまし
たので御座います。出來上りは約一週間の後
と申すことで御座います、どんなに出來上り
ますか、技術の方は申分ないのでありますが私の筆
の方がいかが見ゆかご案じられます。
扱唐譯録御校正済みの由、清書の件兼ての
御約束も有之候事に付小生にさせて頂きたく
存じます、但小生にても難讀の箇所も可有之
ごは存じますが、ごうにか、かうにか出來よ
うかとも存じます。先は右御請け旁御報告申
上候 合掌
▼清水市 小林光様より
一日増に夏らしくなつてまいりました、其後
は思はずも御無沙汰致しました、何卒御許し
下さいませ。上人始め皆様には御變りも御座
いませぬかお伺ひ致します。
扱此度急に結婚致しました十二日に(四月)
こちらに参りました。結婚前上人に御相談申
し上げ様と思つてお手紙書いたのですが、
話が實相寺様の方くまわりましたのでそのま
ゝにしてしまひました。あまり急で御座いま
したので自分ながら夢の様に想ひます……こ
れからが眞の人生でないかといふ感じをしみ

見失つて居るのです。私も此年まで色々な事を學んで参りましたが、そんな學問の智慧なぞ往生の爲めには何の役にも立ちませんのです。私の法の友の一人に阿波の介と云ふ人があります。愚直なよい方です。よく小賢かしい人々のなぶり者にされた様ですが信心堅固な尊い人になりました。或日道友達が私と此の人との信仰の優劣を論じ合つて居たのを聞いて悲しく思ひましたので、有學無學有智無智に依つて信仰の優劣など有る可きでない理りを話した事ですが、全く私の學智は唯だ我力にて往生するものでない趣をハッキリと知り得た處に本當に學び甲斐があつたと思ひます。淨土一宗が諸宗に超え念佛一行が諸行にすぐれて居るのは唯だ此の機の問題に於て、あります。

理觀、菩薩心、眞言、止觀等いづれも尊き佛法のおろかにはありませんが此頃の様に人心が荒んで仕舞つては餘程の人でない限り生死を乗り超へる迄如法修行が出来兼ねる様です。全く機が及ばなくなつたのです。時は三寶滅、罪は十惡五逆、年は人壽十歳、そんなに行詰まつた末法萬年后的惡獨乱世でさへ一念十念に依つて如來の御ふどころに攝取せられる事、是れ皆な大悲誓願の然らしむる所、本當に有難い事です。噫々思へば思ふ程勿体ない如來様の御慈悲、本當に有難い事です。本當に有難い事です。南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。」

上人の御説法は渾々として盡くる處を知らない、見よ禪勝房の顔には二條の光るものさへ認められる。御二人とも法悦に満たされてゐるのだ。(つゞく)

念佛修養會の感想

福原泰作

原吉郎様、過日はわざわざお便りを辱うし御書面の趣き有り難く御受け申します。來る八月念佛別時會には私の都合の出來ます限りは御仲間に入れて頂きませう、去る佐藤益章様宅に於ける會合は私として最初でありました事か興味深く且つ感激に満ちたる催しでありました。そして單なる二日間では御座いましたが多くの事を學び得ました事を土屋上人を始め眞生同行諸賢に對し感謝致し居る次第で御座います。

上人様から始めて嚴然たる宇宙の大法則と永遠に盡させぬ御惠みを教へて頂き心の内で小さけれど新たなもの生れけりと叫びました、そして更に眞生同行諸彦の心からなる御念佛の座席に連りては自分の醜き姿を反省し、且疲れたる魂に憩ひを興へられました。あの時私としては坐に並らばして頂くことが既に限りなき

じみと思はせられます、興へられた自分の生活の上に少しでも惠の多くあります様に祈つて止みません。従前通り、御指導の程を切に／＼お願ひ致します、小林は宗教について何等の修養も御座いません。併し又何時日にか上人の御指導の下に働かさせて頂く時の來る事を信じます……ほんとうに今後共お見すてなく御指導下さいませ様お願ひ致します。

▼淀橋町 小野つゆ子様より

其後すつかり失禮致して誠にすみませんでしたが、皆様如何お暮して御座いますか、私共はお蔭様で丈夫にしのがせて頂いてますから先づ御休念下さいませ、さて先日は突然お邪魔致しまして何度か上人様のお家へ入らせて頂きました時身も心もすが／＼しくなる様でほんとうに嬉しい氣で一杯で御座いました。早速と思ひつゝ、こんなに延引致しまして、どうぞお許し下さいませ。

草も木も大自然の恵みを受けて力強く希望に輝かされてもえ出ですがし／＼い初夏の氣分が致します。

▼岐阜縣 高須圓心寺様より

上人よ、私は此間の行基寺様の念佛會程はつきりとした教化を受けた事は今迄に得られざ

る處でありました。加ふるに佐藤黒宮様での念佛程しつくりと身に付た事はなく、上人の勸化は僅か一日で有つたが私には實に一週間勸化で有つた時間は短かくあつたが、御心は高く深く有つた事をしかんと味いました。其儘が私の永生の路で有つた、實に高き御体験が御身の上に、御心の上に明々感ぜられました。それに健清さんでの中野上人の勸化と黒宮様との共力は實に／＼私に取っては此上なき程の有益なる賜ものでありました。之れも此度私として止むに止まれぬ上人を求むる心より黒宮様の宅を慕つて出てざるを得ない事が基因すると共に、黒宮様の德行自然に私を誘引し給へるかと思へば何しか先后さ定むる事はなけれども、只御佛がかくして私を向上へ導きたまう事何んとも云へない感じに打たれるのであります。

過去の事共思ふ念佛道場を去る時御佛をも去るの感がした私は、此度三ヶ所の御念佛にては道場を去ることも今尚ほ私は御佛を去る事の出來ませぬ、且つて能本上人が一人と對話をする時も念佛は止まぬ、この御詞を思浮はる、と共に實に御詞の嘘ならざるを信する事が出來、その御話もすればする程念佛の益々増

悦びでした、それは俗界を離れれば恍惚として自ら平常のごたごたしたる慾念と煩惱の世界及びいら／＼したる競争の斷工間なき世界が全く失せてシルレルの所謂遊離衝動の状態となり一種微妙なる法悦氣分に浸る事が出来たからです。梵の行者ダゴールは假相の自我を棄て真相我に返し、而して梵との合一境に進めど教へました。私は着坐せる一同が衷心から唱へる南無阿彌陀佛とそれに不思議に調和した木魚の妙音によりて一種名狀し難い聖い響きが私を包み、それに従つて假相の自我を離れ心はぐん／＼天上界を目指して昇つて行くかの如くに感じました。

響きの波紋が次第に高潮すると共に、清く氣高き憧れを持つて共に佛の正道に進み行く同行諸彦夫々の生命は遂に大自然の一大生命の流れに到達してそこに自他生命の合一現象現れ此處に始めて大いなる感激を得ました。それは滾々として汲めども盡させずに湧き出づる泉の水の如く限りなき御恵みの流れであり、或ひはおほらかに且ゆるやかに音なくうねる春の海の如く平和な御恵みの大海原に浴するの感で御座いました。

限りなき現代的苦惱の闇に迷ひ疲れ初つた靈が悲痛な叫び聲を擧げて迄救済を求むる者に衰心からの悦びと明るい希望に輝やく新世界を見出ださせて再び天晴れ聖戰の陣頭に立ちうるだけの感激を受けた彼れの心的變化は恰も所謂ユベルニカスの轉回をなし得

上しはつきりなるのであります。南無阿彌陀佛

▼藤澤町 野中寅次郎様より

先達からは色々御心配を掛け御多忙の身にも不拘らず絶大なる御盡力を賜つた事を厚く感謝いたして居ります。實は直に參上いたした御禮に上らなくてはならなかつたのですけれど遂に無禮いたして居ります。先月の廿六日に一寸御宅を訪れいたしましたが、生憎御不在でしたので残念ながらそのまゝ、歸宅いたしました。

其の翌日から直に當地に參りし關東興信銀行と云ふ小さな田舎銀行に務める事になりました。こゝに這入るに付いては同じ北茂安村の藤永文發氏の御盡力でやつと就職いたし早速去る廿八日から奉職いたして居りますから、他事乍ら御休心の程お願いいたします。

此度の就職の件に付いては各方面の人々に非常なる御助力を煩はし、色々御配慮を添けなうし心から感謝いたして居ります。特に觀道先生には幾度も御手敷を掛け御禮の申しやうもありません、今後とも之にお懲りなく益々御親交を垂れられん事を切望いたします。將來の御指導と御引立を伏しこお願

たかの如き感激で御座います。

實際生活の必要上私共は孤立的存在を許るされざる以上周圍からは色々影響されて居りますが同時に影響されてゐる社會に於ける缺陷を見出して之が改造に微力を惜んではならぬのであります。然らば現代人の心理の裡はどうでありませう、あくまで個人的權利の主張に迷ひ、同胞相争ひ、無反省なる反抗的或は破壞的情熱に馳られて社會に汚毒を流し、物質的、且利那的欲望及び嫉視と焦燥の渦巻中に迷ひ込み、自ら限りなき不安と斷わざる動搖の神經衰弱的氣分の一大潮流に押し流され乍ら救ひの叫びを擧げてゐるのが明かなる現代人の苦惱では御座いませんか、こうした人間精神に對する最良なる藥餌は何か？曰く私は實に宗教的情緒こそ其最なるものであると信するのであります。即ち現代人は平常のいら／＼した焦げつきさうな氣持ちから悉く解放されてもつと精神的に落ちつきあり餘裕ある氣分を教養されたい限りは如何にして此の儘救はれることを得ませうや、而してこの宗教的情緒を教養する事は實に眞生同行者諸君の念佛修養會に待つことゝの甚だ大きい事を痛感致すので御座います。淺薄ですが斯く考へますときに此の眞生運動が如何に意義深き運動であり、社會改良に如何なる重大使命を有するかを窺ひ知られると思はれるのであります。

ひいたします、もう今月は東京を經つて居られるかも知れませんが月末御歸京あり次第早速參上いたし御禮に上りますから、只今の無禮を何卒御許し下さい。

何分遠方の事とて思ひに任せず不本意に過ごして居ります、此度御歸京の日時を甚だ御手数ながら御一報下されん事を御願ひいたして置きます、異様に宜敷く御傳へ下さいませ、先は書面を以て御禮のお言葉に代へます

▼新潟縣柏崎 會田証様より

次に御上人お悦び被下度去る九日夜二男安産致し筆にも口にも現し得ぬ悦びに滿され居り候豫定日より約廿日早く候へしも之れば赤坊の發育充分に達し止るを要せず、如來様の御心のまゝに候

お乳も澤山與へ被下、赤々お肥へ太りたる丈夫層な子供に候、如來様其儘の様に思はれ日々何度と無く感激の涙に合掌致し居り候ドツカ正しき道を歩み得る人さ成さしめ給へと念する親心より正道と名命致し、御上人のお一字を頂き候事お許被下度候昨年今頃は木々の芽の伸び行く一日一日に反し、一人の男の子は日に日に衰へ行きて、身も世も無く其苦しみ依りて漸く御佛への本當の合掌

私共は眞生運動の重大性を持つことを一層深く研究し社會改良の爲め働きたいと思ひます。

終りに日頃好きな一詩を記して擲筆致し度いと思ひます

缺陷が見える。

何んとかしたい。

自分で出来る。

然らばその缺陷に身を投げよ。

それが御身の使命である。

缺陷より缺陷へと身を献げる生涯が。

使命より使命への充實したる生涯である。

——權威より——

編輯後記

□只今漸く本月號を終り先づやれ〜と一息思いたしました。

□唐澤お別時は眞生道友の根本別時、今頃道友皆様方は海抜二千の靈域に身を清め懸命に御修養の事をお察しします、崇徳寺様からお集りの状況の便りを頂きました。

□私は今年は一身の都合上參會の出来ませんでした、事は誠に残念でした年然時々冥目合掌暫くの時間を参加させて頂いてゐます。

□道友の御所感、其他各地の情況などの御投稿歓迎いたします。

(八、七、編輯部にて) 釋常生

自我の執着を自覚させて頂き、今は又斯くの如き慈光の雨に浴するの身は何たる仕合者に候哉、一家悦びの中にお念佛の聲も一段力あるかに聞へ申候

定價一部十錢 半年六十錢 一年壹圓

振替口座東京四七二八八番 眞生社

東京市芝區芝公園第十四號地九番

編輯兼 發行人 土屋 觀道

名古屋市西區隅田町二一番地

印刷所 百々 治之助

名古屋市東區關鍛冶町四ノ八

印刷所 横井 印刷所

東京市芝區芝公園第十四號地九番

發行所 眞生社

(大正十四年八月十三日) 昭和三年八月十日印刷納本 (毎月一回十二日發行) 第七卷 第七號
第三種郵便物認可 昭和三年八月十二日發行 行